Chapter 25 : **ガチャの嵐とカジノの審判**

かつて穏やかに夕暮れを照らしていた街の空は、今や恐怖に染まっていた。

始まりは――ゼラオラだった。

炎をまとったサッカーボールに吹き飛ばされ、半焼けのままコーチ・エースバーンに蹴られ、酔いどれ状態でインテレオンのバーに転がり込む。そこを現場警備員と化したマッシブーンに文字通り放り投げられた。

まだプライドと愚行に火がついたまま、ゼラオラはコンパクトカーをハイジャック。  
ただ走り出すだけのつもりだった――が、運命はそう甘くなかった。

**ガッシャーン！**

路地に飛び出したその瞬間、偶然同時にタウンフレイムと屋上パルクール失敗で落下していたピカチュウに、思い切り突っ込んでしまった。

ふたりはまるでコントのように地面に平たくのびる。

そこへ、またかという顔でホウオウが降臨。  
「あー、またか……」とため息をつきながら、いつものように蘇生。

そして、今度こそとばかりに警察を呼んだ。

ルカリオ、サーナイト、そして格闘軍司令マッシブーン……ではなく、**マッシブーンではなく**、**カイリキー将軍**が現場に到着。

**ゼラオラ**：「触んじゃねえ、青い毛玉が！　俺には権利があるんだぞ！」

**ティンカトン裁判官（通信越し）**：「あったわね、その昔。」

ゼラオラはそのまま法廷に搬送された。  
口を開く前に、ジムのサンドバッグかのように、何度も床に叩きつけられることになる。

ピカチュウは耳を床につけるほど項垂れ、ただ震えながら「許して」と何度も繰り返した。

一方で、2件の衝突の被害者となったタウンフレイムは、しっかりと両者を訴え、ティンカトンはゼラオラとピカチュウに対して**市全域清掃任務**を言い渡した。

その罰の最中。  
廃墟となったゲームホールの裏路地――

ふたりはそれを見つけてしまった。

**UNITE賭博マシン**  
赤く光るラベルが、ただ一言を告げる：

**「TIMI TIMMY Co. 所有」**

そこへ、ふらっとアイス片手に通りかかったアブソル。

**アブソル**：「……触るな。」

**ピカチュウ**（冷や汗）： 「……触らない。」

**ゼラオラ**（ニヤつきながら）： 「もう遅い。」

マシンが目を覚ます。

ガチャボールが空へと弾け飛び、黒いサイクロンが渦巻き始めた。

雲が裂け、雷光の中、黄金のグリッチ文字に包まれてレックウザが降臨。

**「WELCOME BACK, CASINO DRAGON」**

空からプレミアムガチャボールが雨のように降り注ぐ。  
人々は叫び、財布は泣き叫ぶ。

――そのとき。

**ドォン！！！**

空から降臨したのは、戦神のごときバンギラス。

**「……またかよ。」**

血飛沫がビルに降り注ぎ、グリッターと破壊されたルートボックスが舞う中、  
レックウザは一撃で真っ二つ。

市民が歓声をあげる。

血まみれの英雄と化したバンギラスは、重く息を吐きながら立っていた。

**「賭博は終わりだ。これからは……正義だけだ。」**

空は晴れ渡った。

ガチャマシンは砕け散り、ピカチュウは安堵と共に崩れ落ちる。

ゼラオラ？  
またレックウザの頭蓋骨の下に埋もれていた。

**◆作者のあとがき：**

ストーリーの流れも伏線も無視して、いきなり「おれ参上！」って乱入するキャラが全てをぶっ壊す――  
本来はそんなの成立するわけない。でも、成立してしまうのがこのタイプ。

文章のルールを全部ぶち壊してるのに、なぜかやめられない。  
それが、このカオスな熱量の正体。

低予算の昼ドラやミームアニメがカルト的人気を得るのと同じ理由。  
「ありえない」が連続するからこそ、逆に目が離せない。

ユナイトのバランス調整のなさや、ペラいキャラよりもよっぽど生きてる。  
トイレから飛び出すオナラまみれのヤミラミ清掃員の方が、100倍マシってもんだ。